

一般国道276号岩内共和道路 ワークショップの活動内容について —協働型インフラ・マネジメントの取り組み—

小樽開発建設部 道路課 ○大江 祐一
干場 照平
齋藤 秀敏

小樽開発建設部では、一般国道276号岩内共和道路において、地域特性を活かし、安全かつ機能的で、自然環境にも配慮した道路整備を検討・推進しているところである。その検討のために地域と行政が協働してインフラ整備や利活用に取り組む「協働型インフラ・マネジメント」を実施しており、その手法としてワークショップ形式により現地確認や意見交換等を行い、設計に反映している。本文はその内容を紹介するものである。

キーワード：連携・協働、観光・景観、緑化・植生

1. はじめに

北海道開発局では平成21年度の主要施策の進め方の一環として、新たな北海道イニシアティブを推進している。

これは、北海道の優れた資源・特性を活かした全国画一ではないローカルスタンダード導入により、北海道固有の課題に対する独自の取組（北海道スタンダード）や、我が国経済社会の変化に応じた制度設計のフロンティアとなる、北海道の特性を活かした先駆的・実験的取組等を積極的に推進するものである。その内容は（1）北海道固有の課題に対する独自の取組（北海道スタンダード）、（2）他地域にも共通する課題に対する北海道の特性を活かした先駆的・実験的取組、（3）北海道環境イニシアティブの3つからなる。

小樽開発建設部では、一般国道276号岩内共和道路（以下、岩内共和道路）において、前述の取組内容2つ目の、他地域にも共通する課題に対する北海道の特性を活かした先駆的・実験的取組として、地域と行政が協働してインフラ整備や利活用に取り組む「協働型インフラ・マネジメント」を展開している。

本報告では、岩内共和道路における「協働型インフラ・マネジメント」を進めるための岩内共和道路ワークショップの活動内容及びその途中経過を報告するものである。

2. 一般国道276号岩内共和道路について



図-1 岩内共和道路概略図

事業概要

一般国道276号は江差町を起点とし、岩内町、喜茂別町及び伊達市を通過し苦小牧市へ至る幹線道路である。このうち岩内共和道路は岩内町と共和町の区間において、交通安全の向上、交通混雑の解消及び泊原子力発電所での災害時における緊急避難路の確保等に資する道路として事業着手している。

事業区間は岩内郡共和町梨野舞納（りやむない）から岩内郡共和町国富（くにとみ）までの約7.6km、道路規格は3種2級2車線の一般国道である。（図-1）

また、冬季には日本海沿岸特有の地吹雪による視程障害対策として防雪林の整備、交通安全対策として分離構造の採用、景観に配慮した視線誘導施設及び景観資源の活用に配慮した駐車場の検討を行っている。（図－２）



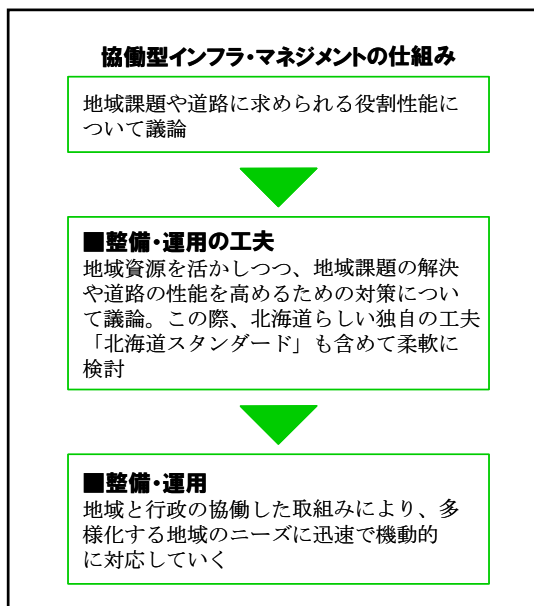
図－２ 岩内共和道路イメージ図

3. 協働型インフラ・マネジメントについて

協働型インフラ・マネジメントの概要

協働型インフラ・マネジメントとは、地域と行政が協働してインフラ整備や利活用に取り組む仕組みであり、様々な場面で協働しながら個々の地域の実情に応じた「使いやすい道路」の整備・運用を目指すものである。（図－３）

これまでの道づくりとの相違点は、必要とされる道路の作り方、道路の使い方や管理の仕方について、その最善の方法を地域と共に話し合い、道路の役割から見て、何が足りないか、何が貢献できるか、地域は何をすべきかを議論する。



図－３ 協働型インフラ・マネジメントの仕組み

また、行動するのは道路管理者だけでなく、ある時は協働で、ある時は地域やユーザーが自ら行うことも考える。そして、地域特性に合わせ、地域の個性を伸ばし、よりよい地域づくりに貢献する道路のデザインと運用方法を考える点である。この協働型インフラマネジメントを推進するために道路管理者と地域やユーザーとの対話の場としてワークショップ形式を採用した。

4. 岩内共和道路ワークショップについて

(1) ワークショップの概要

岩内共和道路ワークショップへの参加メンバーは、北海道の地域特性である、積雪寒冷地・観光資源・シーニックバイウエイといった視点を重視し、道路利用者の視点から道路の性能を評価、北海道ならではのデザインの工夫を話し合いできるメンバーとした。（表－１）

その構成は、地域の道路利用者として、生活者の視点から地域団体より２名、物流の視点から運輸会社より２名、観光の視点から地元の観光施設及び活動団体より２名参加していただいた。

アドバイザーとして、道づくりに詳しい北海道内の学識経験者２名、防雪林等の樹木の機能・育成に詳しい樹木の専門家１名、周辺地域で活動する写真家１名に参加していただいた。

また、行政側は北海道開発局小樽開発建設部、岩内町、共和町として、担当者を複数名配置し、人事異動による人脈が途切れることの無いよう配慮した。

表－１ ワークショップメンバー

地域の利用者	地域の女性をメインとした会（岩内町）
	地域の環境を考える会
	物流事業者
	バス事業者
	木田金次郎美術館（岩内町）
	地域の活動団体（共和町）
アドバイザー	道づくりに関する学識経験者
	道づくりに関する学識経験者
	樹木の専門家
	写真家
行政	北海道開発局小樽開発建設部
	岩内町
	共和町

(2) 全体の流れと検討内容

全体の流れはフロー（図－４）のとおりである。検討当初から地域の利用者として話し合うことにより、地域資源の発掘や課題の認識を共有することでパートナーシップを構築、取り組みを継続することでよりよい道路構造を検討・運用していくものである。

現在までに行った検討・活動内容は、防雪林の育成、景観資源を活用した駐車場の検討を行っている。
 今後は、引き続き景観に配慮した道路構造及び利活用方法について検討していく予定である。

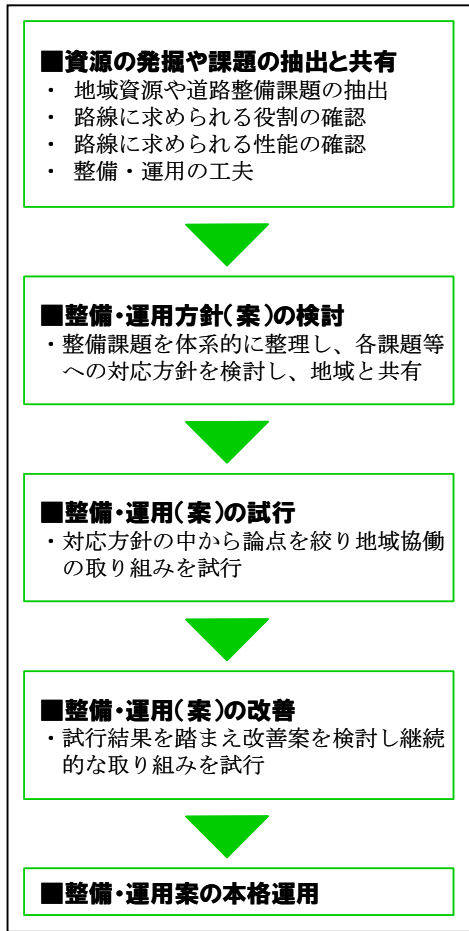


図-4 全体の流れ

掘と活用方法を検討するビューポイント分科会、そして岩内共和道路を通じて地域の情報発信について検討する情報分科会の3つを設置し、開催した。

5. 主な取り組み状況について

(1) 防雪林の植樹

防雪林分科会では、自然環境の大切さ、岩内共和道路及び防雪林の機能の理解、これらへ愛着をもってもらうことをねらいとして、平成18年度に防雪林の体験植樹を、翌平成19年度には種の採取と植付けを行った。

取り組みの概要は次のとおりである。

○平成18年度

実施項目：防雪林用苗木の植樹

参加者：北海道立共和高等学校の生徒
 先生及び地元住民23名

実施内容：アカエゾマツ及びトドマツの苗木各50本の植樹、クリスマスツリーとして活用するための苗木の貸し出しを実施（写真-1）



写真-1 防雪林用苗木の植樹

(3) パートナーシップ会議と各分科会

地域協働を行う上で重要となる、地域住民と対話の場を作るためワークショップメンバーを中心にパートナーシップ会議を立ち上げた。（図-5）

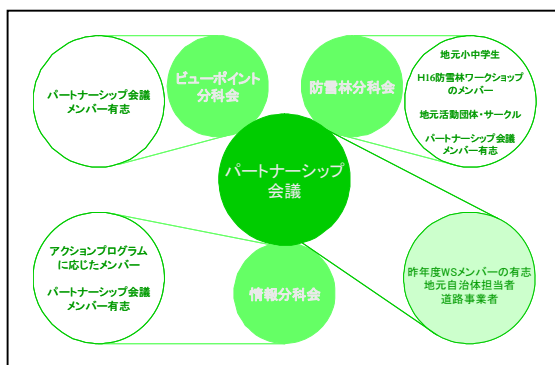


図-5 分科会の構成

パートナーシップ会議を中心に、防雪林の育成及び利活用を検討する防雪林分科会、シーニックバイウェイ支笏洞爺ニセコルート・ニセコ羊蹄エリアの景観資源の発

○平成19年度（種の採取と植付け）

実施項目：防雪林用樹木の種の採取と植付け

参加者：共和町立中央幼児センター園児及び先生37名
 実施内容：地元在来種であるクルミの種採りと種の植付け（写真-2）



写真-2 防雪林用樹木の種の採取

○平成19年度（苗木の植樹）

実施項目：防雪林用苗木の植樹

参加者：はまなす幼児センター園児、岩内・共和両町の住民、岩内・共和町VSP団体60名

実施内容：アカエゾマツの苗木100本の植樹、樹木の専門家から樹木に関するレクチャー（写真-3）

このうち平成18年度の取り組みの中で体験植樹の参加者へアンケート調査を行い、参加者全員が継続を希望するという結果を得た。翌平成19年度は、次世代への継承を考慮し参加者に幼稚園児を組み入れた。

防雪林の体験植樹及び種採取は参加者に好評であり、また、幅広い年齢層で行うことができ、地域協働を実践する上でパートナーシップづくりの手法として有効であると考えられる。



写真-3 防雪林用樹木の植樹

(2) 景観資源の活用に配慮した駐車場の検討

岩内共和道路のある一般国道276号はシーニックバイウェイ北海道の支笏洞爺ニセコルートにあり、その景観資源を活かすべく、景観資源の発掘とその活用方法について検討した。

検討手順は、平成17年度のワークショップにおいて、地図上で景観資源の確認と地域の特性を反映した利用者ニーズ及び使い方を確認し、平成18年度に地元写真家と共に現地を歩き、駐車場の設置候補地を選定した。

（写真-4）



写真-4 景観資源の確認状況

その結果、田園風景とニセコ連峰、田園風景と丘陵地

帯及び夕日の眺望が良好な箇所の3箇所が選定された。

（図-6）

平成20年度のワークショップの議論では、駐車場の使われ方、利用者ニーズの把握をワークショップメンバーの多方面からの意見を取り入れた上で、駐車場の設置位置、箇所数、規模について検討した。また、その中で駐車場で可能な地域の情報提供、景観への配慮といったことも議論された。

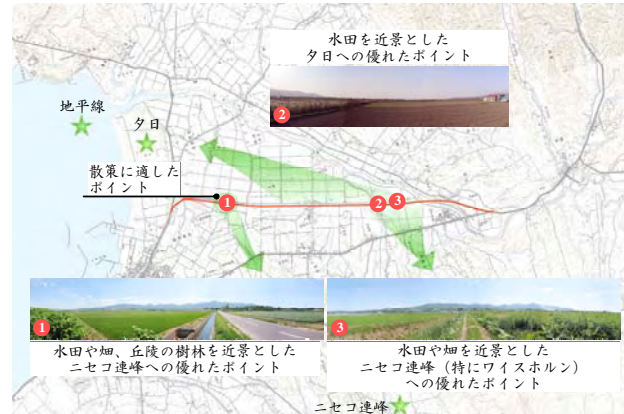


図-6 景観資源を活用した駐車場候補地

議論の結果、設置位置については比較的盛土高さが高く良好な眺望が期待できる、共和町国富側に1箇所・両側に設置し、規模については大型車の停車を考慮せず、乗用車のみ数台程度の小さなものとした。（図-7）

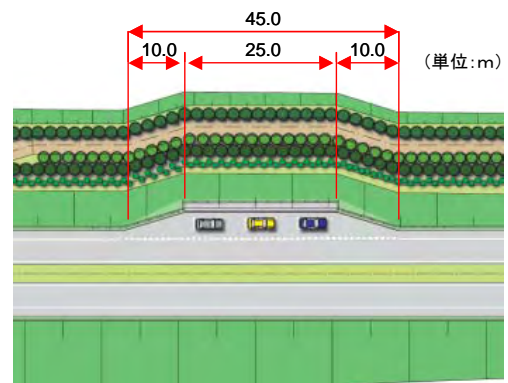


図-7 駐車場設計図

また、同時に駐車場で簡単な地域の情報提供も必要という意見も出され、次回の検討事項とした。

平成21年度は駐車場の具体的な構造等について小樽開発建設部にて関係機関との協議及び設計を経て、ワークショップにおいて報告、メンバーの了承を得た。（写真-5）

また、設置する駐車場で情報提供のあり方として、提供すべき情報の内容や頻度、方法等について議論された。

その内容は、提供すべき地域情報、方式、更新の頻度及び方法等、さらに景観への配慮等総合的に勘案し小型の看板形式とすることで基本形式を決定した。

次回は、その詳細について案の作成及び議論を行う予定である。



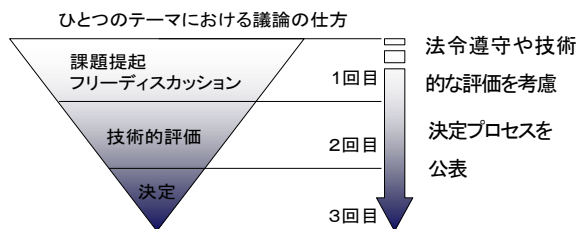
写真一五 平成21年度ワークショップ

6. 今後の展開

これまで、平成17年から21年8月までの間に計8回のワークショップを開いてきた。

今までの活動は企画段階の議論を続けてきたが、今後は設計段階から施工段階そして運用段階へ移行していく。

ワークショップ開始当初は、全体的なイメージが掴みづらく、ワークショップの運営自体も試行錯誤の状態で行っていたが、回数を重ねてきたことにより、ワークショップの展開イメージが確立された。(図一8)



図一八 決定までのプロセス

すなわち、検討テーマ毎に、1回目で課題提起・フリーディスカッション、2回目で技術的検討・評価、3回目で決定というフローに基づき議論を進めていくことになる。

今後は防雪林の利活用や視線誘導施設等、順次検討テーマを変え議論し、完成させていく。また、道路の利活用方法などについても引き続き議論していく予定である。

7. まとめ

平成17年度から続いている岩内共和道路ワークショップは5年を経過したが、この間、本文で紹介した内容について議論・活動を行い、地域の方々との対話を通じて、パートナーシップを形成し、いろいろな意見を取り入れることが出来た。

このうち、駐車場の議論では、地域の方々や物流・バス事業者からは、われわれ道路行政担当者だけではわからないような実態に即した意見をいただき、構造の検討に非常に役立った。

このように、協働型インフラ・マネジメントを推進する上でワークショップによる議論は極めて有効であり、事業推進するうえで非常に役立っている。

今後も地域の声、様々な立場の声を生かせる道路整備、道路の利活用を目指し、引き続き岩内共和道路ワークショップにて、使いやすい道路として岩内共和道路の完成を目指していきたい。

謝辞：岩内共和道路ワークショップに参加し、ご協力していただいているメンバーに感謝をいたします。

また、各地域における協働型インフラ・マネジメントの推進に向けての取り組みの参考となれば幸いです。